

## とある雨の町にて

愛知県立熱田高等学校 一年

西元 楓

ドアベルの音が小さく空気を揺らして、私は扉の方をちらと見やる。帽子を被った、茶色いコートを着こなす背の高い男性が、重たそうな鞆を床に置いて、袖に丸く浮かんだ露をはらっていた。帽子のつばからは、ぽたぽたと、雫が散らばっては転がっている。

「雨が降っていましたかね」

グラスを磨く手を止めて、背後に飾った酒瓶のなかから、ひとつ、丸々と、ひととき大きな瓶を取り出した。

私は、あの茶色いコートの男性を、「ガクさん」と呼んでいる。

ずいぶん前から頻繁に訪れてくれている、いわゆる常連さんだった。彼は初めて来た頃から、暇さえあればこの店に足を運んでくれる、私の唯一の、長い付き合いの知り合いだった。

ガクさんはコートを大きくはためかせた後、鞆と脱いだコートを手にも、いつもの、カウンター席の真ん中に深く腰掛ける。

「来る途中で降られちゃった。つたく、災難なものだ」

「暖房、もう少し上げましょうか」

「ありがたい」

そう会話をしながら、私は手を進めていく。

もう目をつむってでも、この酒は造れてしまうだろう。何度も繰り返して来たこの手順で、淡々と完成へ進めていく。そしてその様子を、ガクさんは飽きもせず、じっと見る。

毎日のように繰り返されてきた光景だった。

透明に磨かれた、逆三角形型のグラスに、そっとカクテルを注ぐ。グラスにうつすらと濁った色が満たされていく様子は、何度見ても良いものだった。

私がグラスをコースターに乗せて差し出すと、男性は何も言わずに、控えめに口をつけ、煽った。

「うん、やっぱり俺はこのギムレットが一番好きだ。なんというかこう、ぐつとくる味なんだよな」

「それは嬉しいことを言ってくれますね」

「んや、ただの本心だよ」

「それは、ますます嬉しいですね」

ガクさんはしばらく黙って酒を口にして、はあ、と重くため息をついてから、ゆつくりと話し始めた。

これも、いつもの出来事だった。

「なあマスター、俺よ……持ち主のところへ帰れるかもしれないね」

少し気まずそうに言うガクさんに、私は笑顔を見せる。

この町は誰にでも出られるわけじゃない。しかし、この町の誰もがここを出たいと願っている。

突然の特権に、ガクさんは私に気を遣ったのだろう。彼は、そういう気遣いが多い男だった。

「それはよかったですか。お祝いですね」

私は本心を言った。しかし、彼はまだ顔を明るくしようとしなない。

「そりやそうなんだが……ここに来れなくなると思うと、ほんの少し未練があつてよ」

本心を素直に話そうとしないのも、変わらない。

「もしそれで気持ちを書いているのだとしたら、このことなんか、きっぱり忘れるべきですよ」

私がそう言うのと、ガクさんはまた黙って、ガラスの肌をなでた。薄く濁った水面が円を描く。

私は再びガラスを磨きはじめた。

「ここは私たちのような、人間に捨てられた夢が住む町なんです。言つてしまえば、ゴミ箱なんですから」

「そう言うことはないだろう。持ち主だって、捨てたくて捨てたわけじゃあるまい」

「……それもそうですね」

それは、私も痛いほどわかっている。

しばらく、キーン、という静寂が流れた。その音を嫌うように、ガクさんはグラスを傾けつつ、話を始める。

「俺の持ち主はさ、絵画コンクールで全国まで行って、でも結局、他の連中に盗作されて、夢を……俺を捨てたんだ。あれ以来、筆を執ることなんてなかったんだがよ。最近になって、またやる気を出したらいいんだ」

そう話すガクさんは、照れたようにはにかんで、顔を手で覆う。

「素直に喜ばいいんですよ」

「俺だって嬉しいさ。ようやく俺の存在が意味のあるものになるんだからよ」

「では、今夜のお代は結構です。お祝いということで」

「そりやいけない。あんただって仕事でやってんだらう」

「ええ。でもいいんですよ」

「……あんたがそう言うなら、お言葉に甘えさせてもらうがよ」

ガクさんとは長い付き合いだ。私が本当は頑固な性格であることを重々知っている。

私はガラスを磨く手を止めて、静かにガクさんに向き直った。

「今日が最後になりそうですね。ガクさんにはお世話になりっぱなしで」

「いやなに、ただの常連客さね」

「それがありがたいというものですよ」

「はは、と、軽く笑いあう。」

こんなことも最後となると、なんだかいつもの時間がとても早く過ぎて行ってしまうようだ。

いつもより少し早く進む時計の針に追われるように、私は眼前の思い出を頭にしまい込んだ。

そんな私とは違い、ガクさんは落ち着いた様子で話していた。

「……なあ、もしまた俺がこの町に戻ってきたら、ここにまた飲みに来てもいいか」

ガクさんの視線は薄く濁った水面を指している。

「冗談でもそういうことを言うものではないでしょう」

「可能性として考えられなくはないだろ」

「ここに戻ってきてはいけませんよ」

自嘲気味に、少しの不安を隠して言う彼に、少し言い方が強くなってしまう。

ため息を一つついて、また訪れる、キーンという音を振り払う。

「今日はこちらにせよ、お代をいただくつもりはなかったんです。もうじき、私もこの店も、なくなってしまうから」

「何だってそんなことを言うんだ。あんた、これまで数十年間、この町

で生き続けただろう」

「ええ。……しかし、私の持ち主は、すっかり老いてしまった。いつ記憶がなくなるのか分かりません。こうやって店を開けるのも奇跡なくらいです」

「そうかい」

ガクさんは、何とでもないように言っただろう。明日の天気でも聞いたときのように。

けれど、たった四文字の言葉に、こんなにも感情が込められたことはあつただろうか。

「聞いてもいいかい、あんたのことを」

耐えかねたように、ガクさんは言った。

「私自身も、忘れてしまいたいことだった。」

「……私はね、ある男の夢だったのですよ」

私の持ち主が、私という夢を持ったときは、まだ年若い少年だった。色褪せた服を嫌がることもなく何度も着て、ぼろになった本も、持てなくなるほどまで短くなった鉛筆も無理して使うような子だ。その子の家は裕福とは言えなくて、いや、むしろ貧しいともいえるほどの苦しい毎日を送っていた。

父は早くにどこかへ旅立ってしまい、夜な夜な泣き崩れる母親と、疎開先の親子と暮らす、幸運とはかけ離れた子だった。

けれど、私には、その子が不幸を嘆いているようには見えなかった。それは私がいたからだ、すぐに気が付いた。私……夢の存在があつたからだ。

少年はまだ幼いながらも、白湯のような米を飲んで、たったそれだけの飯で、よく働いた。泣いている母親を横目に見ながら、「おれは泣い

ちゃだめだ」と、骨みたいな腕をぶんぶんふるって、しっかりと地に足をつけて歩いていた。

屋根から落ちてくる冷たい露も、大きな音で怖がらせる雷にも、小さなこぶしをぎゅっと握って耐えていた。

私はもう一つ気づいた。その少年の隣には、いつも、かわいらしい女の子がいたことを。

疎開先の子供らしかった。少年とは同じ年ごろで、ぼさぼさになった前髪をおでこの上で結んだ、はつきりとした物言いをする女の子だった。

「お母さんはね、あなたたちのことがきらいみたいなの。しんせきって言うているけど、とおい、とおい縁で、あかのたにんみたいなものなんだって」

「ぼくのお母さんは、そんなこと言ってなかったよ。仲のいい人たちだから、きつと助けてくれるって」

「ううん、それはうそなんだって。血もつながつてないって言ってもん」

ああ、子供に何てことを教えているんだ。私は勝手ながらも、そう思った。

「でも、大丈夫よ。あたしがお母さんのかわりに、あなたたちのこと助けてあげるわ。お母さんに知られたら、たぶん、あたしも怒られてしまうかもしれないけど、そんなのいいの」

「じゃあ、ぼくは君のことを助けるよ。これでお互いに助けあっているから、きつと安全だ」

何という純恋だろう。いや、それは恋というにはまだ綺麗すぎるだろうが、とにかくも、私はこの少年の夢として存在することを誇りに思った。

やがて時は経つ。少年は今や青年と呼ばれるほどの男になり、持ち前

の働きぶりをして、厳しいながらも仕事をして働いていた。無論のことながら、あの少女も一緒だ。短かった髪も伸び、しかし幼さのまだ残る、初々しい乙女になっていたのである。

私はまだ、あのころの少年の夢として、彼のそばにいた。このころは、捨てられるなんて、予想もしなかったのだ。なぜなら青年と乙女は、もう婚約まで交わしていたから。

このままなら、私はもうすぐ叶えられる。彼の夢としての存在意義を、果たすことが出来る。そう思っていた。

そのときは、青年は少し遠くの場所まで仕事に行っていた。まだ朝早くの時間だが、小さいころからの働き者で無理しがちな性分故に、早く出発してしまったのだ。

乙女を起こさないようにそっと家をぬけだして、歩くこと、しばらく。誰も油断していた。

そして、八時十五分がきた。

突然の爆音と、目の前が真っ白になってしまうほどの光が届く。火薬のにおい。

急いで振り返って走った。私も、何が何だか分からなくなり、ただ、彼女の無事だけを祈っていた。

家に近づくにつれ、木や草が燃えるにおいがする。走っていると、風のなかに呻き声やら、ものが崩れ落ちる音やらが流れてきた。足を止めたいけれども、今は彼女の安全を確認するのが先だ。そう思って、息をきらしながらも、全力で走った。

そこはまさに、地獄絵図だった。

もともと何もなかったかのように平たくなった土地に、影もない。その瞬間、私は、一瞬の浮遊感を覚えた。足元の地面が消えていく。

「待って！ まだ、助かっているかもしれません！」

私の声と比例するかのように、だんだんと崩れていく地面。

「彼女はまだ……」

本当は私にもわかっていて。彼女がもう、この世にいないことを。

「待って」

完全に地面が崩れ、青年の背中が消えていく。

「捨てないでください……」

その言葉を言ったときには、私は見慣れない町の真ん中で、一人で立っていた。

「あんたはその婚約者と幸せに暮らすっていう夢だったんだな」

ガクさんの声に、意識が現実へと戻される。

私は、暗くなっているであろう顔を引き締めて、口角をあげて見せた。

「決して叶うことはありません。でも、私はずっと忘れられることはなかった。夢は忘れられたら死にますからね。……けれど、結局は数十年と永らえることになってしまった」

「捨てたとはいえ、忘れることはできなかったってわけか」

青年は、今でも私のことを覚えていて。私が見た青年の絶望した背中が、どうなっているのだろうか。

「あの青年が気の毒です。私のことなどさっさと忘れて、他の幸せを見つければよかった。そのせいで今、彼は孤独に死を遂げることになっているのですから」

「……あんた、死後の世界ってやつを信じるかい」

ガクさんが、グラスを一気に煽って言う。

グラスの薄い濁りはなくなっていた。

「まあ、この町があるくらいですし、あるのではないですかね」

「じゃ、あんたは叶うよ。持ち主が死にや、あの世で待つてるお嬢さんが迎えてくれるだろうからね」

「忘れられていなければいいのですが」

「は、何、心配することはないさ」

そう笑うと、ガクさんは、空になったグラスを私の目の前に突きつけて、こう言った。

「その恋にギムレットは早すぎるだろう？」

有名な言葉だった。少し昔の、外国のハードボイルド小説の名セリフだったと思う。「ギムレットには早すぎる」というやつだ。ギムレットは「別れ」を意味する酒であり、そのセリフは、「別れるにはまだ早い」という意味だっただろう。

私はそうやって記憶をたどっていると、なんだか少し面白く、つい吹き出してしまった。

「ガクさんが言うのと、本当にフィクションのワンシーンみたいですね」

「俺はこの台詞に懂れてこいつを飲み始めたようなものだからな」

「そうだったのですか？」

「そうさ。今日だから言うけどな」

格好つけた後に、茶化したように笑うのも、ガクさんの特徴の一つだった。懐かしむように目を細めていると、ガクさんはカウンターにグラスを置いて、何ともなく言った。

「な、今日はもう一杯頼んでもいいかい」

「はい、なんなりと。何をお造り致しましょうか」

「ジントニックを頼む」

「かしこまりました」

ガクさんがギムレット以外を頼むのは珍しいことだった。

最後の日だからと、洒落こんでいるのだろうか。私はそう思いながら

も、手際よく酒を造っていく。

いつもギムレットばかりつくっているからか、少しだけ緊張した。ガクさんは、ギムレットを造るときと同じように、こちらをまじまじと見つめていた。

最後の一滴まで注ぎ終わると、同じようにコースターに乗せて差し出す。

しかしガクさんは、差し出されたグラスを取らずに、私の方に返してきた。

「これはあんたのために注文したんだよ」

「え？」

予想もしなかった言葉に、一瞬固まる。

ふと、私の脳裏に、こんな記憶がよぎった。

ジントニックの意味は、「いつも希望を捨てないあなたへ」であり、友人を励ます際に頼まれることがある。

ガクさんを見ると、穏やかな表情で、私を真っすぐに見ていた。

「腕のいいバーテンダーだ。味は保証するぜ、親友」

軽くウインクするガクさんに、私は唇が引き締まるのを感じた。

「……ガクさんが言うのなら、間違いないでしょうね」

「ああ、俺の舌はよく肥えているからね」

自信あり気に言う姿は、やはりいつものガクさんだ。

「……さて、俺はもう行くとするかな」

カウンター席の真ん中。ガクさんの特等席が、とうとう外された瞬間だった。

私はカウンターの中から出て、扉の目の前までガクさんを見送る。

「ようやくこいつの出番がきそうだよ」

扉の前で、振り向きざまに、重たそうな鞆を持ち上げて見せる。

以前、持ち主に捨てられる前によく使っていた画材だそうだ。どれも古くて年期が入っており、鞆のふちについている絵具たちが、その歴史を語っていた。

私は、ガクさんに向き合って言う。

「きつと、世界一の絵描きになってみせてくださいね」

「傑作の嵐になるだろうよ。ピカソも墓の中から嫉妬するさ」

最後まで、ガクさんは自信ありげに笑っている。

「あんたも、叶うことを祈っているよ」

ドアベルの音が小さく空気を揺らした。

ガクさんは雨の中を、軽々と走っていく。

その背中を見送って、私は静かになった店の中に戻った。

カウンター席の真ん中に座って、置いてあるジントニックを手取る。

美しい水面が、私のくしゃくしゃになった顔を揺らしていた。



## 拝啓おばあちゃん

愛知県立成章高等学校 二年

平井杏果音

中学二年生の夏を過ぎた頃のことだった。この田舎街は夏が終わるとすぐにツクツクボウシが鳴き始め、秋を迎えようとする。朝方も心なしか少し肌寒く感じるようになってきた。午前五時五分。平穏なこの街に時間帯にも似合わず、パトカーと救急車のサイレンが鳴り響いた。その音で目が覚めた私はふと寝室から窓の外を眺めてみる。昨日は小雨がばらついていたのに、どこまでも澄みきった青空と小鳥たちの可憐なさえずり、ツクツクボウシの軽やかにリズムを刻む鳴き声。私はとてもすがすがしい気持ちになった。

「おはよう琴音、ちよっとお母さん外を見てくるね。今日まだ牛舎におばあちゃんが来ていないらしいの」

私は返事をしてゆつくりと制服に着替えた。昨日の出来事を思い出して心の奥が少しだけチクリとする。おばあちゃん、気にしちやっているのかな。そんなことを考えながら、お母さんの帰りを待った。

「琴音、琴音！ すぐその十字路で事故があった、おばあちゃんが……」

大声を張り上げてお母さんが帰ってきた。血の気の引いた真つ青な顔は私にもうつり、そして悟らせた。今日はいつもの朝なのにもうつり、そして悟らない、と。救急車で運ばれたおばあちゃんを追ってお母さんも病院へ行くことになった。私は一人、家に取り残された。

その後私は次々と溢れてくる涙と嗚咽を抑えることができずに、その醜い顔のまま悶々と考えていた。心のはけ口も逃げ場所もこの現実にはどこにもなく、でも、心のどこかで嘘なんじゃないかと思う自分もいて何が現実なのか分からなくなっていた。

おばあちゃんが事故に遭った。

それは当時の私には到底受け入れられるものではなかった上に、あの時に感じた胸の騒めきや心の奥深い場所を抉るようなぎりぎりとした痛みはきつと、一生忘れることができない。

その朝よく分からない感情を抱えて私は学校へ向かった。

やはり学校では今朝の事故のことが話題になっていた。教室のどこかである男子が言う。救急車のサイレン、近所の人の騒がしさのせいで起こされた。自分の睡眠時間を削られたと。思わず私は耳を塞いだ。誰も私がどんな気持ちかなんて分からないくせに。私は親友だけに今回の事故で巻き込まれたのは私のおばあちゃんだということを

伝えた。彼女の顔はどんどん青ざめていった。

「ごめんね、こんな重い話しちやって。次の移動教室行こう」

彼女は移動教室へ行こうとする私をそっと抱きしめて背中をさすってくれた。友達のアタタかな腕の中で今朝からずっと溜まっていた突っかかりや心のがらくたが再び、涙として溢れる。袖口をびしゃびしゃに濡らしてしまった。それでもそんな私が泣き止むまで、彼女は背中をさすり続けてくれた。

この日は好きな授業も全く内容が頭の中に入らなくて、ずっと外を眺めていた。今朝見た時、空はどこまでも澄んでいた。でも今見てみると黒い積乱雲がもくもくと空全体を覆い尽くして暑苦しく感じた。なんだか雲が泣き出しそうな、そんな天気だった。

数学の時間。いくつかの公式をインプットさせられ練習問題でアウトプットさせられる。私は解こうともせず、ただぼんやりと昔の記憶を辿っていた。

「おばあちゃん、早く、早く！」

大好きなおばあちゃんの家で、こうやって泊まるのはこれで何回目だろうか。同じ敷地内には住んでいるものの、おばあちゃんは母屋に、私たちは新築の離れに住んでいた。しかしご飯だけは一緒に食べるという感じだ。だからおばあちゃん

家は私にとって新鮮な場所だった。おばあちゃんと私の家を行き来したり、暇さえあれば「おばあちゃんのうちに行く」とペソをかいとお母さんを困らせていた。

「もう行くが。もうちょっと待ってりんで」

「がっはっは」と豪快に笑うのはおばあちゃんの魅力だった。果たしてこれが魅力と言えるのかは分からないけれど。

「琴音はほんとにわしのことが好きだがん」

おばあちゃんはそう笑って歯を磨きだした。

「ねーえ！ まだじゃん！ 早くしてってば！」

口の中の歯磨き粉を四方八方に飛び散らせながらおばあちゃんは話す。何かを言っているようだが、私にはうあうあと言っているようにしか聞こえない。それが面白くて自然と笑ってしまう。歯を磨き終えると私たちはおばあちゃんの寝床へと向かった。

おばあちゃんはいつも寝る前に日記をつけていた。日記について聞いたところ、もうすでに五十年以上書き続けているのだそうだ。五年用の紫の日記帳をちらりと見ると読めそうにないほど汚い文字が書き連ねてあった。

「おばあちゃん、これ、琴音が可愛くしてあげる！ ちよっと貸して！」

私はおばあちゃんの手から日記帳を強引に奪うとマジックペンで表紙にお絵かきをしていた。まだ小学一年生だった私が描けるものはリングゴウサギ。日記帳の上にくぐちやくちやと一心不乱に

ペンを走らせた。そうしたらおばあちゃんとは、「かわいいが。琴音、お絵かきさん、向いとするが」

私が書いたくちやくちやの絵を見て愛おしそうに目を細めそつと私の頭を撫でた。

おばあちゃんの家なら少しくらい夜更かししたって「今すぐ寝なさい！」なんて怒られることはなかった。夜のお笑い番組を見て、おばあちゃんとおしゃべりをし、お天気チャンネルをつけてじゃれあいながら寝ることだってザラにあった。

そんな時間が私には楽しくて楽しくてたまらない。お化けの出でくるような夜中、トイレのためにおばあちゃんを起こして二人で真っ暗な闇の中に歩いていくのも、おばあちゃんより早く目覚めてお腹に飛び乗ってゆり起こすのも全てが数珠繋ぎのような素敵なお宝だ。いつでもどんな時でも笑いが絶えないおばあちゃんだった。

おばあちゃんは昔からの趣味で野菜を育てることが好きだった。特にブロッコリー。毎年夏の終わりになるとブロッコリーの苗のお世話をし、冬には収穫作業にいそんでいた。私はおばあちゃんのお作ったブロッコリーが大好きだ。お昼ごはんにお母さんがそれを茹でてマヨネーズをつけて食べるあのブロッコリーがとにかくおいしかった。収穫したてのブロッコリーは、茎から葉まで全てがみずみずしくて、口の中に広がる甘味に翻弄されてしまう。

小学校高学年、私はよくおばあちゃんのブロッ

コリーの収穫のお手伝いをしていた。潮風漂う畑まで自転車までひとっこぎして向かった。そこは、見渡す限り全て畑。息を思いっきり吸い込むと潮のざらっとしたしよっぱい空気が胸いっぱいに入ってくる。

この日私はいつものように自転車をこぎ、いつもの畑へ向かっていた。そうすると後ろから見慣れた軽トラが走ってきて私のすぐ前で止まった。「琴音え！ わしの後ろに乗っていきん。自転車もそのまま乗せてくで心配せんていい」

おばあちゃんが窓を開けて大声で叫んだ。たしかにここからだ坂道もあって正直遠い。私はおばあちゃんの軽トラに乗せてもらうことにした。「ちゃんと捕まっときんよ。手え放したら、死ぬで」

私はおばあちゃんの助手席に座ると思っていたから思わずびくびくした。軽トラの後ろに乗っていけと言うのだ。でも少しの好奇心もあったので怖いという感情を捨てて自転車と一緒に後ろに飛び乗った。

「行くが！」

そう言っただけの頬をくしやりと釣り上げたおばあちゃんは軽トラを前進させた。

気持ちよかった。乾いた潮風の中を私一人で切っていくようで。ちよっとだけ息が苦しくてむせてしまったけれど、物凄く足が速くなったように感じた。この世界には私とおばあちゃんこの自転車と潮風しか存在しないのではないかと本気



で疑う。よろよろと後ろを振り返ると、さっきまで前にあった風景がどんどん小さくなっていった。不思議で新しい気持ちだ。思い切り息を吸い込んだら、しょっぱい空気と一面のキャベツ畑の甘い匂いが一瞬にして鼻孔を駆け巡る。真冬の冷たい風が当たって顔は寒いが、手袋も帽子も被っているから平気だ。しかしそんな新鮮な気持ちになつておぼあちゃんが「危ないから座れ」と運転中にも関わらず視線を送ってきた。むうつと頬に空気をいっばいに入れ膨らませて、子供ながらにおぼあちゃんに反抗した。もちろん言われた通り座ったけれど。

そうして流れ過ぎていく畑、畑、畑の景色に目が釘付けになっていると、いつものおぼあちゃんの畑に到着した。

「琴音、今日も頑張りんよ。そしたら後でおぼあちゃん、一緒に昼寝してあげるで」

そんな素晴らしい提案をされてしまったら私が頑張らないわけがない。そして今日の仕事を終えた。

帰った後は収穫したブロッコリーを詰める作業である。ブロッコリーは大きさに詰める数や並べ方が違うので、おぼあちゃんにいちいち聞きながらお手伝いをした。

「おぼあちゃん、これは中くらいー?」

「ねえ、おぼあちゃん、このサイズは六の六だったけ?」

「ねえ! おぼあちゃんってば! 聞いているー?」

最後には、おぼあちゃんはすでに疲れきっていた。ぜえぜえと息をしているのが子供ながらに分かった。「あ、これはさすがにやりすぎたかな」と思ってお母さんの方を見ると、案の定額に手を当て「あちゃー」と言いたげな様子であることも分かった。疲れきったおぼあちゃんにお母さんがお茶を持ってくると言っていなくなると、私を隙を見つけて謝った。そうすると、

「いいがん。琴音がブロッコリーに興味を持ってくれただけで嬉しいがん」  
そう言っておぼあちゃんは汗をかく太陽のようにはははと笑うのであった。

その後おぼあちゃんと約束通り一緒にお昼寝をした。おぼあちゃんも私もすごく疲れていて気が付いたら夕方の五時を過ぎていた。大慌てでおぼあちゃんは夜の牛舎の仕事に、私は習い事のピアノ教室へ向かった。二人で遅刻してしまっただけで、何か少し嬉しかった。

お正月やお盆の時もおぼあちゃんは変わらなかつた。いつでも豪快に笑うし、誰に対しても面倒見が良かった。毎年私の家には親戚が十人ほど帰省してくる。その人たちのおもてなしをするのもおぼあちゃんだった。全員の朝、昼、晩ご飯を作り、寝床を整え、洗濯や片づけをする。そして何より、誰よりも底なしの笑顔で笑う。誰よりも大きな声で。どこにいたって「がっはっはっは」という陽気な、しゃがれた笑い声が聞こえてくるのだ。そんなおぼあちゃんだから、私の従兄弟か

らも大人気だった。聞いていればいつもいつも、「陽子おぼあちゃん!」

と色んな所から声が聞こえた。お正月には来ている子ども達全員にお年玉を渡す。お盆にはおやつの時間にみんながスイカやメロンを食べられるように切って運ぶ。キンキンに冷えたスイカやメロンを食べるといつのまにか涼しくなった。

でもそんなおぼあちゃんに少し妬いてしまうこともしばしばあった。みんながこのうちへ来ることは年に数回とない。だから、おぼあちゃんがかまっておもてなしをするのもよく分かる。それでも、いつもは私だけをかまってくれていたのにこの時だけは後回しにされてしまうことも多くて、少しだけ寂しかったりもした。

小学六年生のお盆休み。私は中学一年生の女の子と高校一年生の男の子とおぼあちゃんとおじさんの五人で地域で開催されている盆祭りへ行つた。蒸し暑く暗い夜道を歩くのはドキドキしたし、お化けが出てきそうで怖かった。でも会場が近くになるにつれ、大太鼓の音が夜の街に響き、人々の騒めきの音も大きくなってきた。心なしかフランクフルトのあの表面の焦げた匂いも漂ってきて怖さなんてすぐに忘れてしまった。

輪投げに射的にヨーヨー、晩ご飯には屋台で焼きそばとかき氷を買った。五人全員が見事に味がブルーハワイで、これまでにないくらいに全員で笑った。

最後にはみんなで一緒に盆踊りを踊った。会場

の中心に大きい太鼓が設置されていて、そこから円を描くようにぐるりと人だかりができ、みんなそこで踊っている。かかっている大きなBGMと轟く太鼓の大きな音に私の心臓はドクンドクンと脈打つ。私達もその中に入り、汗がだらだらと出てしまうほど踊った。おばあちゃんは、「わしは疲れたが」と近くのベンチに座り、私達を羨しそうに眺めていた。年に一度だけ、八月十三日だけは、いつも静かでのどかなこの田舎街が、キラキラと光る都会のように騒がしい街に百八十度変わるのだった。

でも、いつからだっただろうか。自分の中でそんなおばあちゃんが鬱陶しい存在に感じ始めたのは。

いつからか私はおばあちゃんとの会話を避けるようになっていった。中学に上がってやりたくもない運動部に入らされ、毎日へとへとになって家に帰ってくる日々。そんな余裕のない私自身や、それに気が付いているのかいないのか分からないけれどいつものように明るく振る舞ってくるおばあちゃんに腹が立って仕方がなかった。

中学一年生のものすごく暑かった夏。午前の部活動を終え汗たらたらで倒れそうになりながら家に帰った時のことだった。家に着くとお母さんはいなくて台所でおばあちゃんがお昼ご飯を作っていた。ただいまと言わずに口を固く結び、ぶすつとして食卓についた。そんな私を見たおばあちゃんが、

「暑かったのん。ほら、お茶飲んで」

「最近学校はどうだん」

「学校側もよくもまあこんな暑いのにやらせるねえ」

一方的にわつと話した。私は静かにしてほしかった。でもそんなこと、声に出していなかったからおばあちゃんに伝わるはずもなかった。もうその時はただ単に、ウザかった。

「ねえ。お願いだから静かにしてくれない？」

その瞬間私たちの間に沈黙が訪れた。昼のニュース番組のお天気キャスターの作られた明るい声だけが私の耳に届いた。

「ごめんね」

おばあちゃんはそう言って静かに食卓を立ち、私のためにそうめんをとりわけ始めた。「ごめんね」の四文字にどれだけの悲しい気持ちが含まれていたのだろうか。ふと正気に戻った私は、さっき言ってしまった自分の言葉を全力で後悔した。でももう取り返すことなんてできなかった。私は何も言うことができずにお昼ご飯が来ることを待っていた。

「今日の昼はそうめんだね。マヨネーズでもかけて食べりん」

運ばれてきたそうめんを見ると冷やすためか氷が五つ載せてあった。おばあちゃんはまた椅子に座り、静かにテレビを見始めた。私は静かにこくりと頷くとおばあちゃんの作ってくれたそうめんの上にマヨネーズをかけて食べた。冷えたそうめん

はすごくすごく体に染みて美味しかった。

中学二年生の部活三味の夏休みが終わり、新学期が始まった。ある晩、

「だからさ、なんでそんな呑気に話しかけてくるの？ ウザいって何回も言ってるじゃん！」

傍に置いてあった皿を床に叩き付けた。パリンという甲高い音が台所中に響き渡る。皿の割れたかけらが床の上を一瞬踊った。おばあちゃんはおかんとこちらを見ていた。それでも私には関係ない。ガシャンとわざと大きな音を立てて扉を閉める。つぶれたかかとを直しながら靴を履いて。パラと降る小雨の中へ傘もささずに歩いて行く。上を向くと落ちてくる小雨が美しい直線を描きながら私の顔面に垂れ、そしてはじけた。

「あーあ、ウザすぎ。あんなの消えちやえばいいのになあ」

私は毒を吐くように曇天の空へ吐き出した。黒く染まった私の醜い心は浸食されていくばかりだ。

私は軽い気持ちでそんな言葉を吐いたのだった。おばあちゃんがウザい、鬱陶しい、消えてなくなればいい、と。

ふと気が付くと時刻は授業終了の五分前を指していた。同時に私の頬に一筋の涙が流れているのにも気付いた。今ここは学校。泣いたってどう

することもできないのにどんどんと、次から次へと溢れ出す涙。

昨日私はおばあちゃんに何と言った？

「ウザいって言ってるじゃん」

私はおばあちゃんを何と思った？

「消えればいいのに」

おばあちゃんは昨日、どんな気持ちで夜の牛舎の仕事に向かったのだろうか。今朝、何を思って朝の仕事に向かったのだろうか。

もう、取り戻すことなんてできなかった。

おばあちゃんは本当に消えてしまったの？

今朝見た悪夢は私の言った通り本当におばあちゃんをさらって行ってしまったの？

ありがとうも、ごめんねも何にも伝えられていないまま。

私が大好きなあなたの悪口を言ったら、私に残されたのは自分の惨めさと一時的な快樂で。

「消えればいいのに」

本当に消えてしまうなんて、誰も思わないんだ。そしてあとから何度も何度も後悔をする。言葉はもう二度と取り戻すことはできないことを。その一言でああなたの心を、ずきりと深く傷つけてしまったことを。

「また明日があるでしょ」

は、無かった。いつもいつも明日が来るわけではなかった。それに気付かないまま私はこれまで過ごしてしまった。

だから「ありがとう」のたった五文字を言おうとしなかったんだ。

最後には必ず、なんだかんたいつものように笑い合うことができると思っていたから。

おばあちゃんがいなくなって二か月が経った。

私は、小さいころによく来ていたおばあちゃんの部屋を訪れていた。この小さな部屋の中にはおばあちゃんと共に残した淡い思い出がたくさんつまっている。かすかに香ってくるこの匂いもいつも嗅いでいたあのおばあちゃんの匂いだ。部屋に足を踏み入れた途端頭の中で思い出たちがパノラマ再生されて脳内を優しく焦がしていく。再び鼻の奥がツーンとした。私はぐっとこらえておばあちゃんの部屋をぐるりと見渡した。

もう親戚の人たちに一掃されて家具や寝床などはほとんどなかった。しかし一つだけ、陽光差し込む暖かな場所、そこにおばあちゃんがいつも使っていた机が置いてあり、その上に何やら埃のかぶった本らしきものが置いてあった。私は不思議に思っ静かにそれを手に取った。指の腹で表紙を撫で、埃を落としてみるとぐちゃぐちゃの線が無数に現れた。私は思いきってそれを開いてみた。黄ばんだ紙、その上に有象無象に踊り散らかし文章を作る文字。それはおばあちゃんの日記だった。私が幼い頃何度も奪い取っては表紙に落書きをしたあの日記だった。ペラペラと人差し指と親指で大切にページをめくっていく。どこを

とつてもおばあちゃんの楽しそうな文字が生き生きと息をしていた。まるで昨日書いていたかのような。

ふと私はあることに気付く。

琴音が

琴音が

琴音の

私の名前だ。様々な助詞と結びついた私の名前は殴り書きのような、読むことができないほど下手くそな字で何回も、何回も綴ってあった。気付いた時にはもう遅かった。日記帳の上にぼたぼたと涙がこぼれ落ち、おばあちゃんの文字をにじませていく。それなのにページをめくる指は止まらなかった。「琴音」その文字だけは必ず毎日書かれていて、無意識のうちに目で追ってしまいう自分がいた。

拝啓おばあちゃんへ

今私は高校二年生になりました。ある程度やっといういいことと悪いことの分別もつくようになり、恋愛なんて無縁だったのに同じクラスに好きな人もできました。今は勉強と部活動の文芸部と塾を私なりに頑張っています。勉強は最適解を毎回探さなくてはいけないし、部活動で小説を書くことだって毎回ネタを集めなくてははいけません。好きな人にアタックすることはもつぱら、私にとっては初めての経験でやり方が分かりません。

それでも生きていかないと。「つらい」のまま下を向いて歩いていたらいつ電柱にぶつかると分らないよね。そして頭にたんこぶでも作って帰ったら、おばあちゃんが何て言うか知ったものじゃない。

「琴音え、下ばっか見るもんでそうなるだがん」

「ちゃんと前向きんよ」

心配してくれているのか分からないけれどおばあちゃんはこんなふうなことを私に言うよね。なんで分かったかって？ 今でもずっと私の心の中に生き続けるおばあちゃんのあきれた声が頭に響くからだよ。

こうやって私の中でおばあちゃん、あなたは永遠に生きているから。いつだって私を呼ぶバカでかい声が聞こえてくる。好きな人に振られても、受験勉強で挫折してもあなたがずっと応援してくれているから。大好きで大好きで仕方がないおばあちゃんと一緒にいれば何も怖くないのだから。

今さらだと思ふかもしれないけれど謝らせて。

あの時ウザいなんて言って、消えちゃえばいいなんて思って本当にごめんさい。反抗期と天気の悪さが重なって思ってもいないことを言ってしまったんだと思う。もう一度、今さらだけごめんね。

そしてありがとう。いっぱいいっぱいありがとう。私の知らない世界を教えてくれたこと、くだらない話をした時に誰にも負けない大口で笑って

くれたこと、一生忘れない。これからもずっとこの思い出たちと生きていく。もう一度、そして最後に、ありがとう。

最後になりましたが、頼りなくて不器用な私。

それでもおばあちゃんに

「えらい子だがん、琴音」

って褒めてもらえる人になるようにこれから頑張ります。さようなら、おばあちゃん。

敬具





よく飛び出して来た。

「人質作戦失敗です。まあ邪魔者はいなくなったのでよし、としましょう」

「何が目的だ」

「私を後継者候補から外してください。天狗とか古いんですよ。私は現代を生きたいのです。後継者なら兄者に頼んでください」

陽次郎の兄、陽一郎は、弟と違い聞き分けがいい。鼻は短いが背中には父に負けない大きな羽根があり、家臣たちからも慕われている。しかし、妖力は並みの天狗程度で、陽次郎と比べると、妖力の差は一目瞭然であった。だから、陽高は陽次郎を手放す訳にはいかなかったのだ。

「その願いを聞くことはできません。だから無理矢理にでもお主を連れ帰ってみせよう」

陽高は懐から羽団扇を取り出し、陽次郎と屋敷の姿をした狸に言う。

「陽次郎。僕がお主のような若輩に負けるとでも思っておるのか。そのの化け狸。狸の分際で天狗に喧嘩を売った罪、その身をもってわからせてやろう。狸鍋にしてくれるわ！」

陽高は羽団扇を大きく振りかざす。

「……」

しかし何も起こる様子はない。もう一度振りかざす。

「……………」

何も起こらない。陽次郎は笑みを浮かべ、混乱する陽高に声をかける。

「もしかして、これは父上のものですか？」

陽次郎が手に持っていたのは、紛れもない陽高の羽団扇だった。そうなると、今自分が持っているものは……？

「羽団扇以外に、何か懐に入れてはいませんか？ たか？」

陽高は自分の行動を振り返り、気づく。懐に、ここに来るまでの地図を入れていたことを。

陽高は羽団扇を投げ捨てた。すぐに懐に手を入れ、掻き回すようにして地図を探す。しかし、いくら探しても地図は見当たらない。

突如、投げ捨てられた羽団扇は煙を出し、狸に姿を変えた。この狸こそが地図の正体であり、隙をみて陽高から羽団扇を盗み、それを陽次郎に渡していたのだ。

「それを返せ！」

「敵に武器を渡すなど、阿呆のすることです」

陽次郎は陽高の羽団扇を破り捨てた。そして自分の羽団扇を取り出す。

「後継者候補から外してくださいれば何もしません」

「……」

次の瞬間、陽高と天狗たちは突如現れた竜巻に包まれ、跡形もなく姿を消した。

「あらら。逃げられてしまいましたね」

羽団扇のない身では勝てないと判断した陽高は、陽次郎を連れ帰ることは諦め、役立たずの天狗たちを連れて逃げ出したのだ。

陽高たちが姿を消した途端、山は消え、数百匹の狸が現れた。そして、天狗であるはずの陽次郎自身も狸に姿を変えた。

そう、この山自体が狸であり、彼らは陽次郎の同朋であった。最初から陽次郎はその場になかったのだ。陽次郎は狸たちに知恵を与えただけ。本人は今頃、どこかで父の悔しがり顔を想像して笑い転げているだろう。

陽高はまだ知らない。自分は狸に化かされて逃げ帰ったということに。